

さくらサイエンスプログラム同窓生による

新型コロナウイルスに関する現況報告会

2020年8月5日に、さくらHPに掲載されている現況報告から6カ国の代表（インドネシア、インド、カザフスタン、パキスタン、タイ、中国＝発表順）がスピーカーとなり、「新型コロナウイルスに関するオンライン国際会議」が開催された。このウェビナーには世界21の国と地域から約130人が視聴し、社会的距離の確保や自己隔離、マスクの使用、手指消毒、体温測定などといった既知の感染予防策のみでなく、新しい生活様式（ニューノーマル）の在り方に関する、各国独自のさまざまな施策やアイデアが共有された。

当日の様子を動画で視聴できます↓

<https://www.youtube.com/watch?v=Ua5PiXJTrVA&t=199s>

●各国の感染対策と現在の状況（発表者と所属）

①インドネシア（Dr. Thohawi 国立アイルランガ大学）

医療従事者と患者の接触を最小限に抑えるための医療支援ロボット（体温測定やモニターを通した診察が可能）が活躍している。また、自走型消毒ロボット、ウイルス核酸や抗体の迅速診断キット、未確定感染地域の患者に対する検査用移動型ラボ、インドネシア独自の人工呼吸器、現地で分離したウイルスゲノム配列に基づき作成したワクチンの開発、などの取組みが紹介された。さらに、ウイルス感染予防のために免疫を強化できる国産ハーブ類も一般向けに宣伝を行ったことが取り上げられた。

②インド（Dr. Dhaygude マハラストラ動物・漁業大学）

多くのスタートアップ企業がコロナウイルス感染症予防対策のための革新的な製品を開発している。人間型ロボットがビルの入口で入場者に手指消毒液を提供し、感染予防のPRを行い、また、医療施設では隔離病棟へも食事の配膳などのサービスを行うなどして、医療従事者の負担を軽減している。一方、あるベンチャー企業は空港のセキュリティゲートのような全身消毒トンネルを開発し、注目されている。宗教施設では混雑を避けるため、自宅での祈祷を推奨している。医師对患者の割合が、1:1445であるため、感染予防が強く求められている。

③カザフスタン（Dr. Aubekerova カザフスタン農業大学）

コロナ禍の非常事態であるため、人々の自助、共助の意識が高まっている。市民の間では必要な薬を手でできない人々のための専用サイトを作り、適切に薬を分配できるシステムが構築された。また、医療現場ではスタッフ不足のため、医療関係の学生が補助業務を行い、活躍している。介助を必要とする高齢者と社会的弱者を介助者とマッチングさせる試みも始まっている。国としてもワクチン開発を進行中で、世界保健機関（WHO）も有力なワクチン候補として認定している。

④パキスタン (Dr. Saeed 獣医動物科学大学)

8月5日時点の感染者数は約28万人(人口:約2.1億人)だが、回復率88.9%、死亡率2.1%となっている。大規模のロックダウンのみでなく、必要に応じて、狭い区域や通り単位で行う小規模のスマートロックダウンも実施された。感染者が確認されたエリアに限定したその施策は、経済的損失を最小限に抑えるためにも効果的であった。一部の公的施設は利用できるが、全ての教育機関は9月15日まで一斉閉鎖(オンライン授業は実施)。医療機関での密集を避けるため、軽症患者への遠隔医療も一般的になり、人間のみでなくペットも獣医による遠隔医療を受けることができる。大規模イベント会場やホテルも一時的な検疫施設として利用され、また、モスクでの集会は自粛され、会堂内のカーペット類は撤去されている。パキスタンが独自に開発している人工呼吸器も研究が進んでいる。

⑤タイ (Dr. Pisamai チュラロンコン大学)

タイのコロナウイルス追跡アプリの Thai Chana では、建物に入場する際には QR コードを読み込むことで、その店舗や施設の混雑具合や感染予防策への取組みについて知ることができる。また、その場から離れた後に感染が報告された場合には、無料検査の対象となる。発表者の大学構内では各所で体温測定を行うなど、様々な感染予防策を実施している。同大学が開発中のワクチンは今年秋頃にフェーズⅠ、来年3月までにフェーズⅡ、そして、来年後半にフェーズⅢ、または緊急時投与認可を目指す。

⑥中国 (Dr. Liu 中国農業大学)

キャンパス内(中国農業大学)の建物に出入りする際には、フェイス ID(顔認証システム)で記録される。博士論文の学位審査もオンラインで実施された。6月11日まで大学職員はキャンパス内に留まるように指示されたが、その数日後、大学の本拠地である北京市では、約200人の陽性症例が確認された。そのため、6月27日に大学の全職員と学生、計5,821人に対してPCR検査を行い、全員が陰性であった。

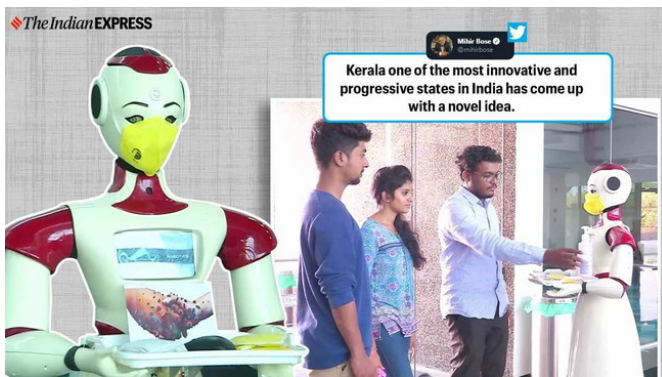
各国からの発表のあと、黄教授より海外からの参加者のために日本の現状について説明があった。

●黄鴻堅教授による報告

日本ではロックダウンを実施せず、緊急事態宣言を発令した。違反者は罰金や逮捕の対象にはならない。日本の主要な対策は、いわゆる「3密」を回避することである。日本人は元々、マスクを着用する習慣があり、公共の場での着用は容易に受け入れられている。現時点で日本政府が承認している新型コロナウイルス患者の治療薬としてはレミデシビル(エボラ出血熱、SARS/MERSにも使用)およびデキサメタゾン(致死原因の1つであるサイトカインストーム<免疫過剰現象>を軽減するための免疫抑制剤として使用)がある。



黄教授（当時、左上）と各国の発表者



医療機関で活躍する人間型ロボット<インド>



免疫カアップ効果のあるハーブ類<インドネシア>



医学生も医療現場の補助業務で貢献<カザフスタン>